

〔原著〕 松本歯学 12 : 71~78, 1986

key words : 高齢者 — 老人ホーム — 食事形態

## 特別養護老人ホームの歯科的健康管理に関する研究 第1報 桔梗荘入所者の歯科治療への関心度について

西山孝宏, 川島信也, 梶田伸二, 福沢雄司, 小笠原 正

山本卓二, 気賀康彦, 伊沢正彦, 渡辺達夫, 笠原 浩

松本歯科大学 障害者歯科学教室 (主任: 笠原 浩 教授)

### A Practical Study on the Dental Health Care System for the Aged in Nursing Homes

#### Part 1 An investigation on the demand for dental treatment in the Kikyo-so

TAKAHIRO NISHIYAMA, SHINYA KAWASHIMA, SHINJI MASUDA, YUJI FUKUZAWA,  
TADASHI OGASAWARA, TAKUJI YAMAMOTO, YASUHIKO KIGA, MASAHICO IZAWA,  
TATSUO WATANABE and HIROSHI KASAHARA

*Department of Dentistry for the Handicapped, Matsumoto Dental College  
(Chief : Prof. H. Kasahara)*

#### Summary

One hundred aged people who live in the nursing home 'Kikyo-so' were investigated as to their life condition and their demand for dental treatment.

The following findings were obtained ;

1. They consisted of twenty-two men and seventy-eight women, aged 65~94 (average : 78.5). Although the Kikyo-so opened fifteen years ago, about sixty percent of them had lived there for less than three years.

2. Seventy-five percent of them were suffering from brain disorders including sequelae of cerebral apoplexy (61.0%), cerebral arteriosclerosis (10.0%) and softening of the brain (4.0%). The others had systemic diseases such as chronic heart diseases (6.0%).

3. Most of them were suffering from mental and/or physical disabilities. Only twenty percent of them could walk on their own. About sixty percent of them could not see well, and about forty percent had hearing disorders. Mental impairment was found in more than half.

4. Most of them required help and assistance in their daily life. Without assistance, only twenty-six percent of them could walk, forty-four percent could eat, five percent could

bathe, sixteen percent could dress and undress and thirty-two percent could excrete their body wastes.

5. With only one exception, all of them were insured by the social security system. Eighty-nine percent were covered by medical insurance for the aged.

6. Most of them required special foods such as gruel. Only sixteen percent of them could take an ordinary meal.

7. As many as twelve percent of them complained of acute symptoms in their oral cavities. Half of these complaints were about toothaches. Immediate dental treatment should be performed for these people.

8. Twenty-nine percent of them had impairment in their chewing ability.

9. Forty-five percent of them were using removable dentures. This ratio seemed extremely low in comparison with the average for that age group.

10. As the greatest difficulty in receiving dental care, seventy-three percent of them stated the difficulty of visiting a dental clinic.

11. Twenty-seven percent of them expressed a desire to receive dental treatment.

## 結 言

高齢化社会の到来と共に、高齢者の保健・医療対策が大きな問題となってきた。歯科の分野においても、今後の対応を十分に検討しておく必要がある。これまで一般の人びとの社会通念としては、年を取れば歯は自然に抜けて無くなるものであり、歯科医を訪れるのは、入れ歯を入れる時くらいだと思われてきた。しかし、人間の寿命が延びればその分だけ食べる能力も延長されなければならない。「自然な形の食物を、いつまでも自分の歯でおいしく味わって食べたい」という要求は、当然今後ますます強くなっていくことと思われる。このような医療需要に正しく対応するためには、補綴学的な側面だけでなく、全身状態を的確に把握した上での総合的な歯科的健康管理が必要といわざるをえない。これまでも歯科治療を必要とする高齢の患者は決して少なくはなかったはずであるが、その実態は必ずしも明らかにされていない。

著者らは、高齢者の歯科保健・医療対策の望ましいありかたを求めて、さまざまな研究と実践に取り組んでいるが、今回は高齢者の歯科医療需要についての研究の一環として松本歯科大学近隣の特別養護老人ホーム桔梗荘の入所者の実態調査を行なってみた。

## 対象および方法

### 1) 対 象

塩尻市内の特別養護老人ホーム「桔梗荘」入所者100名（男22名、女78名）である。

### 2) 調査方法

老人ホームにて、直接に面接の上で実態調査を行なうとともに、図1のような質問紙を用いて、歯科治療に対する関心度についてのアンケート調査を行なった。的確な返答を得るのが困難な対象者では、介護の職員より回答を得た。

### 3) 調査内容

#### (1) 入所者の実態調査

対象者の生活状況を詳しく把握するため以下の項目について調査した。

① 入所者の年齢および入所期間

② 主病名

③ 心身の状況として、歩行、視力、聴力、知能、および食事形態（主食、副食）

④ 介護状況として、歩行、食事、入浴、衣服の着脱、および排便

⑤ 社会保険の加入状況

#### (2) 歯科治療に対する関心度についてのアンケート調査

① 治療必要度の緊急性を知るために、口腔領域の疼痛の有無及びその内訳を調査した。

② 咀嚼の状態を知るために、食事形態や本

人が咬めるか否かを調査した。

- ③ 補綴状況を知るために、有床義歯の使用状態と本人の満足度を、また、有床義歯未使用者については補綴必要度をたずねた。

- ④ 本人の歯科治療に対する意識を知るために、歯科治療を受けるにあたって心配な点、ならびに歯科治療を受けたいと思っているか否かを尋ねた。

## 結 果

### (1) 入所者の実態調査

- ① 入所者の年齢構成は、最少65歳、最高94歳、平均年齢78.5歳で、75～79歳が全体の26.0%と最も多かった。男女比は約1:4であった(表1)。

入所期間は、桔梗荘は昭和45年に開設し、15年を経ているが、1年以上3年未満の者が31.0%と最も多く、次いで1年未満の者が30.0%を占めていた(表2)。

- ② 入所者の主病名として：脳卒中後遺症61.0%、変形性膝関節炎11.0%、脳動脈硬化症10.0%、虚血性心疾患6.0%、脳軟化症4.0%、脊髄性運動失調症3.0%、パーキンソン症候群3.0%、呼吸器疾患1.0%、消化器疾患1.0%であった。脳卒中後遺症が61.0%と最も多かった(表3)。

- ③ 心身の状況：歩行不能者47.0%、器具を用いて歩行可能者33.0%、自立している者20.0%で、歩行が自立している者は2割しかいなかった。また、視力においては正常38.0%、弱視55.0%、全盲7.0%で、約6割の者が視力になんらかの障害があることがわかった。聴力では、聾4.0%、難聴35.0%、正常61.0%で、約4割の者が聴力に障害があった。知能では、正常49.0%、痴呆軽度27.0%、痴呆重度24.0%で、知能に障害のある者が半数を占めていた(表4)。

食事形態の状況については、主食及び副食が普通食の者16.0%、主食が全粥、副食が普通食の者64.0%、主食が全粥、副食がきざみ食(おかずを細かく刻んだ物)の者が16.0%、主食が全粥、副食がミキサー食(おかずをミキサーで砕いた物)の者1.0%、主食が7分粥、副食がミキサー食の者2.0%、流動食の者が1.0%と主食

が全粥、副食が普通食の者が64.0%と最も多かった(図2)。

- ④ 介護状況：歩行について介助の必要な者26.0%、一部介助を要する者36.0%、歩行不能

## アンケート

○印を付けてください

- お口やその周辺で痛むところがありますか？  
(1)はい①歯が痛む ②アゴが痛む  
③舌が痛む ④その他\_\_\_\_\_
- 食事をするのにうまくかめますか？  
(1)はい  
(2)いいえ
- 入れ歯を入れてますか？  
(1)はい①入れ歯に満足している  
②満足していない  
(2)いいえ①必要がない  
②必要だが入れていない
- 痛む歯の治療や新しい入れ歯を入れて、食事を楽しくとりたいと思いますか？  
(1)はい①楽しく食事はしたいが治療はいやだ  
②治療したい  
(2)いいえ
- 歯科治療を受けるに当たり、心配な点がありますか？  
(1)時間がかかる  
(2)費用が心配  
(3)病院まで通うのが大変  
理由①体の不自由  
②付き添いがいない  
③その他\_\_\_\_\_

(4)痛いのでいやだ  
(5)その他\_\_\_\_\_

ご協力ありがとうございました。その他お困りの点がございましたらお聞かせください。

松本歯科大学病院特殊診療科

お名前\_\_\_\_\_

記入して下さった方\_\_\_\_\_

図1：質問紙

表1：年齢別入所者状況

性別 \ 年齢	60歳未満	60-64	65-69	70-74	75-79	80-84	85-89	90-94	95歳以上	計
男	0	0	3	5	5	6	3	0	0	22
女	0	3	5	8	21	19	15	7	0	78
計	0	3	8	13	26	25	18	7	0	100

表2：入所期間

性別 \ 期間	1年未満	1年以上 3年未満	3年以上 5年未満	5年以上 10年未満	10年以上 15年未満	計
男	5	9	3	4	1	22
女	25	22	11	10	10	78
計	30	31	14	14	11	100

表3：入所者の主病名

病名	男	女	計	病名	男	女	計
脳卒中後遺症	16	45	61	変形性膝関節炎		11	11
脳動脈硬化症	4	6	10	脳軟化症		4	4
虚血性心疾患		6	6	呼吸器疾患		1	1
脊髄性運動失調症	2	1	3	消化器疾患		1	1
パーキンソン症候群		3	3	合 計	22	78	100

表4：心身の状況

区 分	歩 行			眼			耳			痴呆等		
	不能	器具	自立	全盲	弱視	正常	聾	難聴	正常	重度	軽度	なし
人 員	47	33	20	7	55	38	4	35	61	24	27	49

表5：入所者介護状況

区 分	歩 行			食 事			入 浴			着 脱 衣			排 便		
	自分で可能	一部介助	歩行不能	自分で可能	一部介助	全面介助	自分で可能	一部介助	全面介助	自分で可能	一部介助	全面介助	自分で可能	一部介助	おむつ使用
男	2	12	9	8	11	4	0	6	17	2	4	17	3	5	15
女	24	24	29	36	30	11	5	20	52	14	14	49	29	6	42
計	26	36	38	44	41	15	5	26	69	16	18	66	32	11	57

表6：社会保険の加入状況

保険の種類		年 齢			計
加入者の数	国 民 健 康 保 険	65歳未満	65歳以上 70歳未満	70歳以上	
	健 康 保 険	5	11	65	81
	各 種 共 済 組 合	1	1	13	15
	計			3	3
		6	12	81	99
医 療 保 険 未 加 入 者				1	1
医 療 扶 助 を 適 用 さ れ て い る 者				1	1
老 人 医 療 受 給 者 証 所 持 者		2	8	79	89

な者38.0%と介助が必要な者が7割であった。食事摂取が自分で可能な者38.0%、一部介助を要する者41.0%、全面介助を要する者15.0%と食事摂取に介助を要する者が過半数を占めていた。入浴については、自分で可能な者はわずかに5.0%、一部介助を要する者26.0%、全面介助を要する者69.0%と入浴に介助が必要な者が95.0%もあることがわかった。衣服の着脱が自分で可能な者は16.0%で、一部介助を要する者18.0%、全面介助を要する者66.0%と衣服の着脱に介助が必要な者も8割に達していた。排便についても、自分で可能な者は32.0%で、一部介助を要する者11.0%、おむつを使用している者57.0%と、排便に介助が必要な者も8割に達していた(表5)。

- ⑤ 社会保険の加入状況：1名を除く全員が、なんらかの社会保険に加入していた。国民健康保険が81.0%で最も多かった。老人医療受給者は、89.0%であった(表6)。

(2) 歯科治療に対する関心度についてのアンケート調査

ト調査

- ① 口腔領域の疼痛の状況：現在疼痛があると答えた者が12.0%あった。疼痛の内訳では、歯の痛み50.0%、顎の痛み25.0%、舌の痛み8.0%であった(図3, 4)。
- ② 咀嚼の状態：「咬める」と答えた者55.0%、「咬めない」と答えた者29.0%と、「咬めない」と答えた者が多いことがわかった(図5)。
- ③ 補綴の状況：有床義歯使用者45.0%、有床義歯未使用者41.0%であった。有床義歯使用者の満足度は、満足42.0%、不満足、31.0%であった。義歯未使用者に義歯をいれたいかとたずねた結果(補綴必要度)は、「入れたい」者48.0%、「不必要」者22.0%で、「わからない」29.3%で、積極的に義歯を求めている者が48.0%と多いことがわかった(図6, 7, 8)。
- ④ 歯科治療を受ける際の心配な点は、「通院困難」と答えた者73.0%、「治療時の痛み」と答えた者3.0%、「時間がかかる」と答えた者3.0%、「費用が心配」と答えた者2.0%、その他4.0%

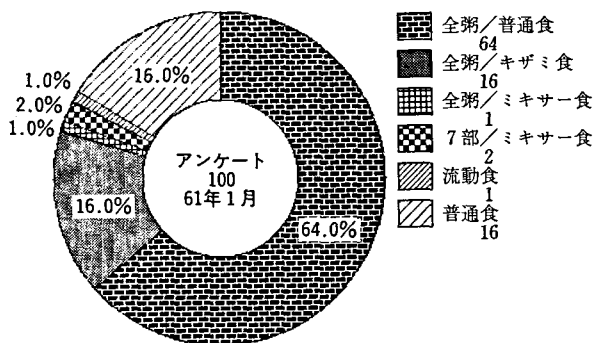


図2：食事形態の種類

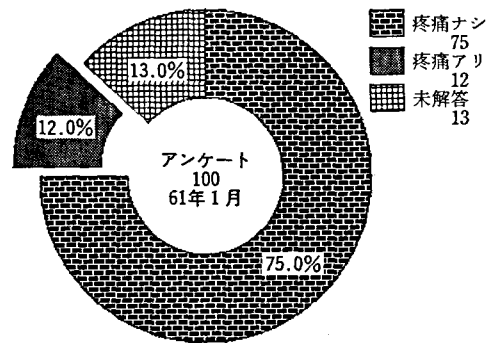


図3：口腔領域の疼痛の有無

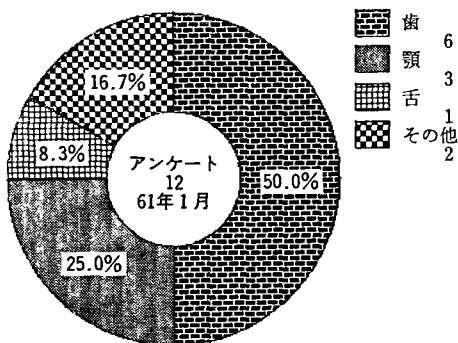


図4：口腔領域の疼痛の内訳

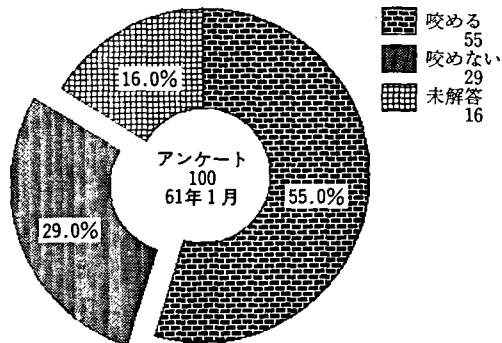


図5：咀嚼の状態

と、通院困難と答えた者が73.0%と最も多かった(図9)。

歯科治療を受けたいと思っているか否か：「受けたい」と答えた者36.0%,「受けたくない」と答えた者27.0%,「わからない」37.0%で、歯科治療を積極的に希望する者27.0%もあった(図10)。

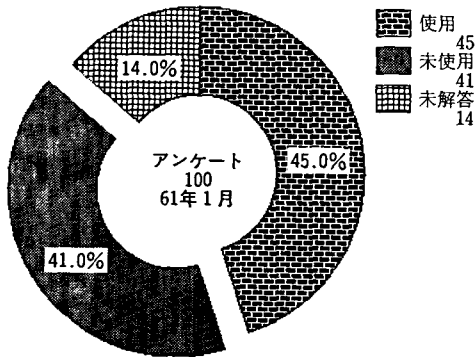


図6：有床義歯使用の状態

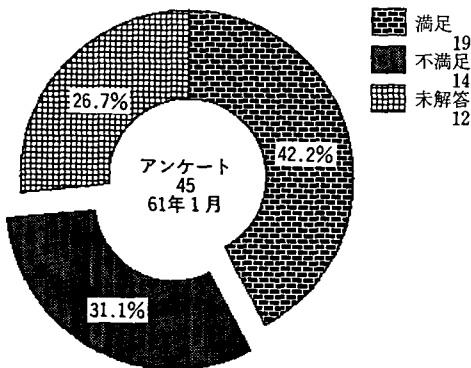


図7：有床義歯使用者の満足度

## 考 察

桔梗荘は松塩筑木曽福祉施設組合が昭和45年5月に開設し運営している。入所各件は「65歳以上の者であって、身体上、又は精神上著しい欠陥があるため常時介護を必要とし、かつ居宅においてこれを受けることが困難なものを特別養護老人ホームに収容する(老人福祉法 第11条第1項3号)。また、65歳未満のものについてもその者の老衰が著しいとき、その他その者の福祉のため特に必要なときは上記の措置をとることができる(老人福祉法第11条第2項)」であり、これらの条件を満たす老人が入所している。

今回著者らの行なった実態調査結果より、男女比1:4とやはり女性の長寿傾向が明らかとなった。また、開設後15年を経過しているにもかかわらず、入所期間1年未満の者が30.0%、1~3年未満の者が31.0%と多かったことから、このような

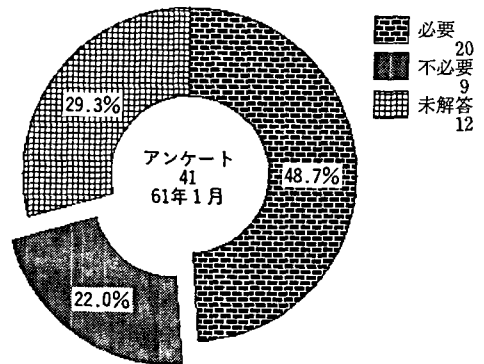


図8：有床義歯未使用者の補綴必要度

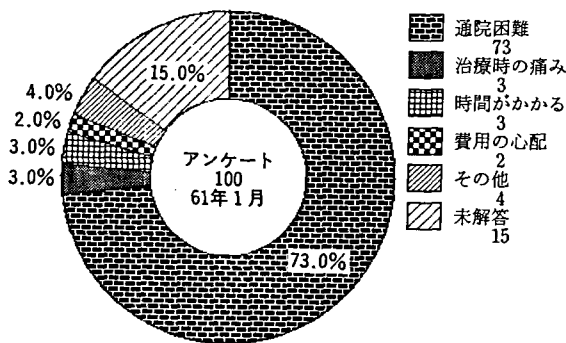


図9：歯科治療を受ける際の心配点

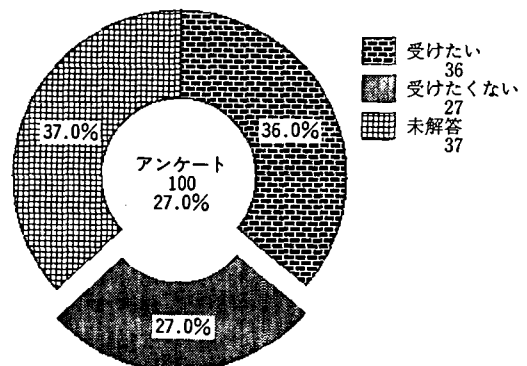


図10：歯科治療を受けたいか否か

施設では、入所後まもなく死亡する者が少ないものと考えられる。

心身の状況では、歩行が現在も自立している者は全体のわずか2割にすぎず、また、視力障害者が約6割、聴力障害者が約4割、患者とのコミュニケーションを確立することに相当な困難を伴うことが予測される。高齢者の歯科治療を円滑に行なうためには、その心理特徴を理解することも必要である。

長谷川和夫<sup>2)</sup>は、高齢者の心理特徴および接し方を次のようにまとめている。

#### 高齢者の心理特徴

- 1) 思考や行動のスピードの低下がみられる。
- 2) 知的機能の衰退がみられる。
- 3) うつ気分が起り易い。
- 4) 被害的な気分になり易い。

#### 高齢者との接し方

- 1) 高齢者は防衛的、拒否的態度を取り易いので時間をかける。
- 2) 高齢者のスピードに合わせる。
- 3) 適切な面接距離を保持する。耳が遠くなるので、1 m以内の距離を保って話す。
- 4) 適切な情報の与え方。簡単な指示で必ず理解したかを確認する。
- 5) 非言語的な働きかけ。例えば smile, skin-ship 等。

こうした特徴を理解して、適切な態度で接することは、これからの歯科医療を担当する者としてきわめて重要な課題と思われる。

日常生活においても、7割以上の者が歩行介助を要することから考えれば、一般の歯科医院への通院には少なからず問題があると考えなければならない。食事、入浴、衣服の着脱、排便などにも介助を要するのであるから、口腔清掃とりわけブラッシングについても、大部分の者は自力では不十分であり、介助を必要とする予想される。健康な成人を対象とした在来の歯科医療供給体制や保健対策ではまったく不十分で、それなりの見直しが必要とされるべきである。

社会保険の加入状況は、医療保険未加入者は1名のみであって、国民健康保険加入者81.0%、老人医療受給者率89.0%であった。しかし、現行の歯科保険診療体系の不備、とりわけ高齢者に対する補綴が不採算となりがちな点も、高齢者の歯科

医療を充実させていくうえで今後大きな課題となろう。

入所者の食事形態の状況で、普通食を摂取している者は16.0%しかおらず、高齢者で普通食が適さない場合を除いても、他の大部分の者が全粥などの特殊な形態となっていることは、適切な補綴物の装着によって咀嚼機能の回復を要することを示唆するものといえよう。

口腔領域の疼痛を訴え緊急な歯科治療の必要性がある者は12.0%で、その内訳では歯痛が50.0%であったが、今回の対象者の半数には知能障害があるため、自分の症状を的確に伝えられない場合も多いと考えられるから、「疼痛あり」と答えなかった者でもなんらかの症状があり、多くの者が歯科治療を緊急に必要としていると思われる。

咀嚼の状況でも、咬めないと答えた者は29.0%であったが、同様に咬めなくても咬めると答えた者がいることが考えられ、実際に困っている者はこれ以上にあると思われる。

有床義歯使用者率45.0%は、厚生省歯科疾患実態調査<sup>2)</sup>の同一年齢層の有床義歯使用者率64.5%と比べ大幅に下回る数字である。また、有床義歯の満足者率は42.0%で渡辺郁馬<sup>3)</sup>の伊豆山老人ホーム（入所者は健康な高齢者）の有床義歯の満足者率（良および普通と答えた者）78.0%と比べて著しく低い。今回の調査では、有床義歯使用者率が41.0%と低かったにもかかわらず、義歯装着を求める者が意外に少なかったのは、適切な歯科医療に接する機会がないまま無歯顎に慣れてしまっている者、あるいは、義歯そのもののさえない者がいることも考えられる。知能障害のために義歯使用の必要性が理解できない者も少なくはないようであった。

歯科治療を受ける際の問題点で最も多かったのは「通院困難」73.0%であった。日常的な身の回りの処理にも介助を必要とする対象者では当然であろう。「治療の際の痛み」3.0%、「時間がかかる」3.0%、「費用が心配」2.0%などの問題をあげた者は比較的少なかった。この「通院困難」という最大の問題を解決するためには、施設への出張診療や往診など、すでに著者らが心身障害者を対象に展開している新しいスタイルでの歯科診療の効果が大きいと考えられる。この問題を解決すれば治療需要は、潜在的なニードから積極的なデマンド

へと、大幅に増加するものと予想される。

今回の調査で具体的に治療要求を示した者は27.0%にとどまったが、この点についても、対象者自身のあきらめや遠慮、あるいは知能障害により治療の必要性があるにもかかわらずそれを自覚していない者などが相当数あり、潜在的な歯科需要はきわめて大きいものと考えられた。

なお、著者らは、引き続いて同一の対象者について口腔疾患の実態調査を行ない、ニードとデマンドとの関連についてさらに検討を加え、第2報として報告する予定である。

### 結 論

特別養護老人ホーム入所者100名の健康状態及び歯科治療への関心度を調べたところ以下のことが明らかとなった。

1. 入所者の平均年齢は78.5歳、75～79歳の者26.0%，男女比1：4の割合であった。また、入所期間は1年以上3年未満の者が全体の31.0%と最も多かった。

2. 入所者の主病名で最も多いのは脳卒中後遺症で全体の61.0%，脳動脈硬化症10.0%，脳軟化症4.0%と脳に主疾患を有する者が全体の75.0%を占めた。心疾患を主病名とする者は全体の6.0%にすぎなかった。

3. 心身の状況としては、歩行が現在も自立している者は全体の2割にすぎず、視力障害者が約6割、聴力障害者が約4割、知能障害者が半数以上と大多数の入所者に相当な程度の心身の障害がみられた。

4. 日常生活においても介護を必要としない者は、歩行26.0%，食事44.0%，入浴5.0%，衣服の着脱16.0%，排便32.0%にすぎず、大部分の入所者は職員の介助を必要としていた。

5. 社会保険の加入状況は、未加入者1.0%だけで、国民健康保険81.0%，老人医療受給者89.0%であった。

6. 食事形態では、普通食を摂取できる者は16.0%にすぎず、大多数の者が全粥など特殊な形態の食事を摂取していた。

7. 口腔領域で現在疼痛を訴えている者が12.0%あり、内訳では歯痛が50.0%と最も多く、早急に治療処置が必要であることが明らかとなった。

8. 咀嚼の状態では、咬めないものが29.0%もあった。

9. 有床義歯使用者率は45.0%同一年齢層の有床義歯使用者率64.5%（厚生省歯科疾患実態調査1981年）と比べ、大きく下回っていることが明らかとなった。

10. 歯科治療を受ける際の心配点で最も多かったのは、「通院困難」73.0%であった。

11. 積極的に歯科治療を求めた者は全体の27.0%であった。

以上のことから、老人ホーム入所者では歩行困難や日常生活の介助を要する者が大部分であり、一般の歯科医院への通院には少なからざる困難があると考えられた。咀嚼状態や有床義歯使用状況、ならびに本人の治療要求の多さなどに対して、早急になんらかの対応が必要であると考えられた。

### 文 献

- 1) 長谷川和夫（1985）こころの老化と歯科治療。老年者歯科，初版，52—58。デンタルダイヤモンド社，東京。
- 2) 厚生省（1981年）昭和56年厚生省歯科疾患実態調査報告，20—127。口腔保健協会，東京。
- 3) 渡辺郁馬（1985）老年人口増と歯科治療老年者歯科。老年者歯科，初版，20—25。デンタルダイヤモンド社，東京。